

エトワール! ☆

オデット^{ひめ}姫^{いの}の祈り

うめ だ 梅田みか／作 ゆ う 結布／絵



講談社 青い鳥文庫

も

く

じ



おもな登場人物
.....

★1 信じられないできこと 6

★2 今年は「白鳥の湖」第二幕！ 25

★3 何より大切な「登場のシーン」 44

★1 ついにクラスも受験一色!? 64

★2 本物の王子があらわれた！ 84

★3 振り付けには全部意味がある 105

★4 主役は孤独 124





★12	★11	★10	★9	★8
わたしにしか踊れないオデット……	最強の助っ人、登場！……	ふたりきりのリフト練習……	透くんのアドバイス……	勉強もバレエも大ピンチ!?……
227	205	184	163	143

バレエのことが
よくわかる
コラムだよ!



めいのバレエ教室

① バレリーナのあこがれ「白鳥の湖」……	13
② バレエの基本・足のポジション……	16
③ バレエ団の最高位「プリンシパル」……	27
④ そろえて踊る「コール・ド・バレエ」……	46
⑤ オデットの「グラン・パ・ド・シャ」……	59
⑥ 華やかなポーズ「アロンジェ」……	76
⑦ 息をのむ美しさ「瀕死の白鳥」……	164
⑧ バレエの衣装「チュチュ」……	237

あとがき

おもな登場人物



もり はら
森原 ジュン

2歳ちがいの、めいの妹。もともとサッカーをやっていたが、めいの影響でバレエも始めた。身体能力が高く、バレエはどんどん上達中。ミュージカルも大好きで、オーディションを受けたことも。



もり はら
森原 めい

6歳から有村バレエスクールでバレエを続けるバレエ大好き少女。公立中学3年生。中学生になってから「宝石のパ・ド・トロワ」、「パリの炎」ジャンヌのヴァリエーションなどに挑戦。中3になって参加した本格的なコンクールでは、キトリのヴァリエーションを踊って予選通過を果たした。



み わ あん じゅ
三輪 杏樹

めいと同じ、有村バレエスクールの友達。ニューヨーク育ちで、インターナショナルスクールに通っている。スタイル抜群でティーン雑誌のモデルもやっている。中2のときスイスに短期留学した。



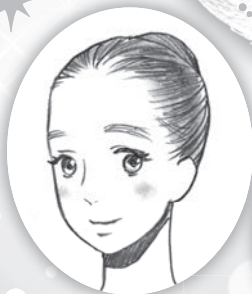
おお わだ みなみ
大和田 南

いっしょにバレエを習っていて、めいがなんでも話せる親友。中学受験のためにバレエを休んでいたが、合格後レッスンに復帰した。



さき さか り お
向坂 梨央

めいと同じ有村バレエスクールの友達。同学年ではないがバレエが上手で、そのことに自信を持っている。



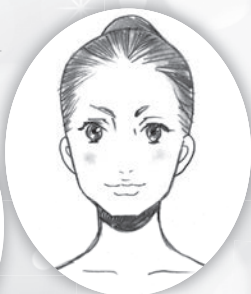
の の みや
野々宮さやか

ありむら
有村バレエスクールの、み
んながあこがれる先輩。受
験のためにレッスンを休ん
でいたが、大学に入学して
バレエに復帰。同じ年の透く
んとは仲よしで、めいはやき
もきしている。



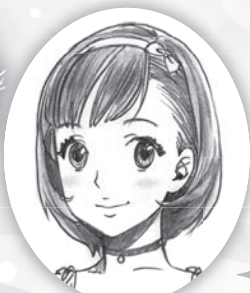
つきむら とおる
月村 透

ありむら
有村バレエスクールの先
輩で、マスコミも注目の
「バレエ王子」。約1年間
のロンドンへのバレエ留
学を終えて帰国した。



ありむら ちづる
有村千鶴

ありむら
有村バレエスクールの先
生。生徒の個性に合った
指導をしている。めいた
ちが中学生になってから
は、舞台上で踊るチャン
スを増やしてきた。



いとう かなこ
伊藤佳菜子

めいの小学校からの友達。呼
び名はカナ。めいと同じクラス。
おしゃれて明るい人気者。中1
のときから、同じ学年の彼氏・
レンレンとラブラブ。



みな かみれい か
水上麗華

めいと中学で同じクラスの
バレエ少女。背が高く、美
人で強気。でも思いやりも
あるお嬢様。勉強もバレエ
も全力投球で、めいは一目
置いている。



1 信じられないできごと

「おはようございます。」

わたしが有村バレエスクールに着いたのは、高等科レッスンの始まるちょうど一時間前だった。スニーカーを脱いでいると、有村千鶴先生がスタジオのドアから顔を出した。

「めい、来たのね。時間びったり。」

千鶴先生はにつこり笑ってわたしに手まねをした。スタジオに入ると、もちろんまだ生徒は誰も来ていない。

この間の日曜日、千鶴先生の友達の渡辺朋美先生が主催するバレエスクールの発表会に出演したあと、楽屋の廊下で千鶴先生に「次のレッスンのとき、一時間前にバレエスクールに来てくれる？」って声をかけられた。「はい！」って返事したものの、なんで呼ばれたのかはわからない……。

「さあ、どうぞ、座^{すわ}ってちょうだい。」

千鶴先生^{ちづるせんせい}は、いつも座^{すわ}っている先生専用^{せんせいせんよう}の椅子^{いす}の前に、折りたたみ式^{しき}のパイプ椅子^{いす}を広^{ひろ}げて置^おいた。わたしはドキドキしながらその椅子^{いす}に座^{すわ}って、肩^{かた}にかけていたバレエバッグを床^{ゆか}におろした。このせまくてちよつとボロいスタジオに通^{かよ}って十年^{ねん}になるけど、こんなふうに千鶴先生^{ちづるせんせい}とふたりきりになることつてめつたにないから緊張^{きんちやう}する。

「今日^{きょう}はいきなり呼び出^よしてごめんなさいね。めいに早く伝^はえないといけなことがあつたの。」

千鶴先生^{ちづるせんせい}はわたしのほうに少し身^みを乗り出^だすようにして言^いつた。早く伝^はえないといけな
いこと？　なんだろう……。

「めいに、発表会^{はつぷようかい}でオデットをやつてほしいの。」

え？　オデット、つてあの、「白鳥^{はくちやう}の湖^{みづうみ}」の？　でもオデットをやつてほしいつて、ど
ういう意味^{いみ}？　オデットのソロ……ヴァリエーションを踊^{おど}るつてこと？　それとも王子^{おうじ}と
ふたりで踊^{おど}るパ・ド・ドウとか？　うーん、わからない……。すると千鶴先生^{ちづるせんせい}は、ひとつ
息^{いき}をついてから口^{くち}を開^{ひら}いた。



「今年の発表会は、めいを主役に、と考えているの。」

一瞬、時間が止まったような気がした。千鶴先生……今、なんて？ ううん、わたしの聞きがちいかも……。

「白鳥の湖第二幕、湖のほとりの場面で、めいに主役のオデットを踊ってほしい。」

しゅ、主役!? わたしが……？ そんな……信じられない！ 何も言えずにかたまっているわたしに、千鶴先生はまじめな顔で何度かうなずいた。

「おどろくのも無理ないわ。高校受験を控えている中三のめいに主役をお願いするなんて、タイミングが悪いことは重々承知してるの。」

千鶴先生の言葉に、現実引きもどされた。そう……わたしは公立中学に通う中学三年生で、来年の二月には高校受験が待っている。そしてバレエスクールの同級生の大和田南、向坂梨央、三輪杏樹の「仲よし四人組」の中で高校受験があるのはわたしだけ。少なくとも、千鶴先生が話している相手はわたしでまちがいないみたい。

「でも、発表会はバレエスクールの看板。大げさかもしれないけど、私の命なの。だからこそ、発表会の主役を踊る子はずねに、去年でも来年でもだめ、今年しかない。」

千鶴先生はきつぱりと言いって、わたしの目をまっすぐに見た。

「それが、今年ことしはめいなの。今年ことしの主役しゅやくはめいしくないの。」

本当ほんとうなの……？ 千鶴先生は本気ほんきでわたしを発表会はつぷかいの主役しゅやくにしようとしてるの？

「それに私わたし、ひらめいてしまったのよ。『やさしさの精せい』を踊おどるのを見て、めいに白鳥はくちう、オデットを踊おどらせた、つて。」

やさしさの精せい……この間あいだの発表会はつぷかいで、南みなみ、梨央りお、杏樹あんじゅと妹いもうとのジュン、そしてバレエスクールのあこがれの先輩せんぱいで、大学生だいがくせいの野々宮ののみやさやかちゃんと六人にんで「眠ねむれる森もりの美女びじょ」プロローグの「妖精ようせいたちのパ・ド・シス」を踊おどった。

わたしが踊おどったやさしさの精せいはとらえどころのない「ジミにつらい」ヴァリエーションで、何なにをがんばればいいかわからなくて最後まで苦勞くろうした。そのとき「めいの表現ひょうげんを見みせて」と言いった千鶴先生は、わたしのやさしさの精せいをそんなふうに見みてくれていたんだ。

「この一年間ねんかん、私わたしはめいを見てきて、『踊おどる意い志し』がででてきたと思おもうの。教おしえられたり、誰だれかに言いわれたからやるのではなく、自分じぶんで考かんがえて踊おどる意い志しがね。」

踊おどる意い志し……この一年ねん、千鶴先生ちづるせんせいにずっと「自分じぶんで考かんがえなさい」と言いわれ続つづけてきた気き





がする。そのときは突き放されたような気持ちになったけど、いつまでも手取り足取り教えてもらう子どもではいられないんだってわかった。自分で考えて、自分の表現を見つけていくことのむずかしさ……そして楽しさを知った。

「今のめいなら、立派に主役をつとめられると思うの。どうかしら？」

千鶴先生……なんてうれしい言葉！

「はい、やります！ わたしに主役を、オデットをやらせてください！」

すぐに元氣よく答えると、千鶴先生はわたしの顔をちよつと心配そうにのぞきこんで言った。

「めいのご家族は、反対しないかしら。よりもよって受験前なんて、ご両親には本当に申し訳ないと思ってるのよ。」

「大丈夫です！」

そう言い切ってしまったから、わたしの頭の中には、発表会練習と受験勉強の両立のことや、主役の費用のことや、お父さんをどうやって説得するか、なんてことが次々と浮かんで頭の中をぐるぐるとかけめぐった。



「あ……大丈夫だと、思います……。」

そうつと言いなおすと、千鶴先生はにつこり笑つてうなずいた。わたしも胸の奥から喜びがこみ上げて、につこりと笑つた。

発表会の主役をやる。まさか自分の人生にそんなことが起こるなんて！ うれしい……夢みたい！ ああ、でも……まだ信じられない！



「アラベスク、グリッサード、グラン・パ・ド・シャ……。」

ハツと気づくと、千鶴先生が正面の鏡の前でアンシエヌマン、一連の動きをやってみせていた。え？ もう最後のグラン・ジャンプ？

「めい、何ぼうつとしてんの？ 行くよ！」

「ああ、うん……！」

みなみ南に肩をたたかれて、あわてて上手、正面の鏡に向かって左の奥のコーナーにスタンバ

イした。わたしつたら夢心地で、今日のレッスンはずつと、雲の上でふわふわ踊ってるみたいだった。千鶴先生がせっかく主役を選んでくれたのに、こんなことじゃだめ……もつと氣を引きしめないで。

ワルツの音楽がかかり、まず梨央と杏樹が前後に並んで、下手、正面の鏡に向かって右の前方に向かってななめに進む。グラン・ジャンプ、大きなジャンプはセンターレッスンのしめくくりで、ふたりずつ、スタジオをななめに使つてやることが多い。

最初はピケのアラベスク……右脚を出してつま先を床に刺すように立って、後ろに脚を上げるアラベスク。その脚を前について、右

めいのバレエ教室①

バレリーナのあこがれ「白鳥の湖」



誰もがその名を知っているバレエ、「白鳥の湖」。

ロシアの作曲家チャイコフスキーが作曲し、1877年にモスクワのポリショイ劇場で初演されました。その後、初演とは別の振付家、ブティパとイワノフによって改訂され、チャイコフスキーの死後の1895年、サンクトペテルブルクのマリインスキー劇場で全幕が上演されます。

永遠の愛をテーマに、主役のバレリーナが、白鳥と黒鳥の二役を踊る作品として有名です。今では、多くの振付家がさまざまなバージョンを発表している、不滅の名作。わたしも大好き！（めい）



脚をすり出して、左脚で踏み切つて、すり出した脚のほうに移動するグリッサード……これは次のジャンプの助走の役目をするつなぎの「パ」、ステップ。

そしてグラン・パ・ド・シャ……右脚の膝をまげて前に上げながら、左脚で踏み切つて両脚の膝を伸ばして前後に大きく開きながら跳ぶ。七月のコンクールでわたしと南が踊つた「ドン・キホーテ」第三幕の「キトリのヴァリエーション」の振り付けにも入っている華やかなジャンプ。

よし、最後は気合を入れて、空中で両脚を百八十度開いた写真が撮れるぐらいきれいに跳ぼう！ わたしたちの番が来て、南とふたりでコーナーから踊り出す。つま先も膝もきれいに伸ばしてアラベスク、グリッサード、グラン・パ・ド・シャ……ああつ、勢いつきすぎて雑になっちゃった!?

「めい、そんな乱暴に跳ばないの！ 必死で川を跳び越えてるみたいでしょ？ ジャンプよりグリッサードをていねいに意識しなさい、森原めい——!」

あちゃー、久しぶりに千鶴先生にフルネームでどなられちゃった！ 見ている下級生たちもクスクス笑つて。恥ずかしいつ！ ふう、次に反対側、下手奥コーナーから上手前

に向か^むってやる時にはちゃんと気^きをつけよう。

「レッスンの最後^{さいご}になって、ようやく目^めが覚^さめたみたいね。」

みんながひととおり踊^{おど}り終^おえてから、千鶴先生^{ちづるせんせい}はやれやれといった表情^{ひようじよう}でわたしに言った。うわー、ぼうつとしてたの、バレてた!? って、そりやあバレるか……。

「せつかくやさしさの精^{せい}をやつて、最近^{さいきん}はつなぎのパを大事^{だいじ}にして踊^{おど}れるようになってきたのに、しつかりしてよ。」

「はい！」

思^{おも}わず背筋^{せすじ}を伸ば^のばして返事^{へんじ}すると、スタジオ中^{じゆうちゆう}が笑^{わら}った。二歳^{さいとし}年下^{した}の妹^{いもうと}のジュンなんていちばんおつきな声^{こえ}で笑^{わら}ってるし……あーもう恥^はずかしさ倍増^{ばいぞう}!

でも千鶴先生^{ちづるせんせい}、今^{いま}、「最近^{さいきん}はつなぎのパを大事^{だいじ}にして踊^{おど}れるようになってきた」って言^いったよね? どなられちやつたあととだけど、それは何^{なに}よりのほめ言葉^{ことば}。

やさしさの精^{せい}は「基礎^{きそ}ができてない^みと見^みるところがない踊^{おど}り」って千鶴先生^{ちづるせんせい}に言^いわれて……バレエの基本^{きほん}中の基本^{きほん}、体^{からだ}の中心^{ちゆうしん}から股関節^{こかんせつ}を外側^{そとがわ}に開^{ひら}くアン・ドウオールが苦手^{にがて}なわたしにはかなりの試練^{しれん}だった。ふだんは見^みせ場のテクニクに集中^{しゆうちゆう}してつい流^{なが}してやつ



ちやうのような「なんでもないとこころ」をていねいに踊ることをがんばった。

その努力がオデットにつながったのかもしれない。もうこうなったら、何がなんでもお父さんを説得して、発表会の主役をやるお許しをもらわなきゃ！

「ウケる、今日のめい、マジ拳動不審なんだけどー！」

レッスンが終わり、となりに来た南がぶふと笑った。そうだよね……六歳からずっといっしょにバレエをがんばってきた親友の南には全部お見通し！

「さては透くんと進展アリ!? なんかあったっしょー、コノコノー！」

めいのバレエ教室

バレエの基本・足のポジション



お話の中に普通に出てくる足のポジション。足の置き方は番号で決められています。このほかに両足をまっすぐそろえる6番もあります。わたしは習いはじめ、5番が苦手だったな。想像しながら読んでみてね。(めい)



ばん
1番

かかとどうしをつけ、つま先は外に向ける。180度になるのが理想。



ばん
2番

1番から両足を約1足半分開く。つま先は外に向ける。



ばん
4番

5番の前の脚を1足分前に出して、置く。



ばん
5番

両脚の膝とつま先をそれぞれ外側真横に向けて前後に重ねる。

南は耳元で言って、ひじでぐいぐい、突つついてきた。
「そうだったらいいんだけど、ぜんぜん。透くん、バレエ団の公演に出ててしばらく会えてないし。」

わたしがプロのバレエダンサーとして活躍する「バレエ王子」、月村透くんのが好きなのを知ってるのは、このバレエスクールで南だけ……あ、あとジュンもね。

「そっかー。じゃ、受験勉強のしすぎ？ 今からあんまり力入っちゃうと息切れするから気いつけなよー。」

南はわたしの肩をもみながら言った。ありがと……南は中学受験を経験してるから、いつもいろいろアドバイスをしてくれて助かってる。お父さんをどうやって説得すること、本当は南に相談したいところだけど、配役のことはまだ言えない……。

「ねえねえ、今年、発表会、何やると思う？」

ジュンがクールダウンのストレッチをしているわたしと南の間にぴよんと入ってきて言った。おーっと、お願いだからジュン、今そんな話題、やめてよー！

「そうだねー、『コッペリア』はアリじゃない？」



南が腕を組んで天井を見上げながら言った。

「三幕だったらいヴエルティスマンもいっぱいあるから発表会向きでしょ。ねーまたみんなだ『仕事の踊り』やっちゃうー？」

仕事の踊り……なつかしい！ あれは小学生最後の春休み……わたしたち仲よし四人組でルナバレエカンパニーの公演に出演したの。いヴエルティスマンっていうのは、全幕もののバレエの中の、物語の本筋とは関係ない余興の踊りのこと。

「じゃあ、ジュンは『眠れる森の美女』がいい！ 杏樹ちゃんがやった白い猫、やりた
いー！」

「眠り三幕はおとしやったばっかやん。ない、ない。」

南にあっさり否定されてジュンはしゅんとした顔をした。

「ワタシも賛成、ジュンの白い猫、見たい！」

わたしたちの会話を聞きつけた杏樹が言った。

「だからない、つつーの！ 杏樹はなんだと思う？」

南が聞くと、杏樹はうっとりしたような顔で言った。

「『シンデレラ』！ この間シアターで観て、ロマンティックですばらしかったの！」

「ねーそれって杏樹、思いつきりシンデレラ役ねらい？　じゃあイジワルなお姉さんたち誰やんのよ。うーん、キャラ的に、梨央とうち？」

そう言つて南がニンマリ笑つたへん顔をするから、わたしたちはいつせいに吹きだした。

「シンデレラはないと思うな。うちのレパトリーにないし。」

梨央がそつぽを向いたままぼそつと言つて、まじめな顔でこつちを向いた。

「リオの予想は……白鳥の湖。」

ギク！　うそ……梨央、するどい！　そして、梨央は確信をもったように続けた。

「の、第三幕。黒鳥のグラン・パ・ド・ドウは派手で盛り上がるから、発表会にいいんじゃないかな。」

さ、三幕!?　おお、そつちか……梨央、惜しいっ！

「ねー梨央、もしかして二年連続の主役ねらつてない？」

南がわたしをひじで突つつきながら言うのと、梨央はどうでもよきそうに肩をすくめた。



「まあね。つねに目標は高くもたないとな。だってさやかちゃんは何年も連続で主役やつてたんだから。」

うわ……梨央、今年も主役をねらってたんだ。すごい自信……それでわたしが主役なんて聞いたら、どう思うのかな……。

「で？ めいはなんだと思う？」

南がこつちを向いた瞬間、わたしはあわてて立ち上がった。

「あ！ 今日早く帰ってうちでやらないといけない課題があるんだ、ごめん、お先にー！」

早口で言つてごまかして、そそくさとスタジオをあとにした。受験勉強のことだと思つて「おつかれー」「がんばってー」と言ってくれたみんなには申し訳ないけど……うそをついたわけじゃない。「うちでやらないといけない課題がある」のはほんとだから……それもかなりむずかしい課題。いったい、なんてお願いすれば、お父さんは許してくれるんだろう？



「お父さん、これ……千鶴先生からの手紙です。」

夕飯が終わったあと、お父さんに千鶴先生から預かった手紙を渡した。読んでないから内容はわからないけど、きつとわたしに主役をやらせたということと、発表会にかかる費用のことが書かれてるんだろな。

ジュンがキッチンで、「何？ 何？」とお母さんのエプロンを引っぱってる。オデットのことはまだ、お母さんにもジュンにも話してない……まずはお父さんに話さない。

「めいは、どう考えているんだ？」

手紙を読み終えたお父さんは、何度かうなずいてから聞いた。

「わたしはオデットをやりたいです。発表会の主役をやるのは、子どもの頃からの夢だから。」

でも、お父さんに許してもらうためには、わたしだって何かを捨てなくちゃいけない



……勇氣を出してその先を続けた。

「高校は、かならず都立に行きます。目標の都立を目指して一生懸命勉強します。」

夏休みの間、ずっと考えていたバレエ専門の高校への進学。「めいの将来の可能性をせ

ばめることになる」とお父さんに反対されても、なかなか思いを断ち切ることができなかった。その進路をあきらめて、お父さんとの約束どおり都立高校に行くこと。それがわたしなりに考えた、主役をやらせてもらうための条件だ。

「主役の練習は、ものすごく大変だと思う。でもぜったいに勉強をおろそかにしません。このチャンスを逃したら、一生後悔すると思う。だからお願いします……この発表会の主役をやらせてください！」

わたしは祈るような気持ちでお父さんに頭を下げた。もう、これでだめならしようがない……これ以上、お父さんを説得できる材料はもってないから。お父さんはしばらく腕組みをしてから、口を開いた。

「めいが自分で考えて決めたのなら、お父さんは何も言うことはないよ。」

え……何も言うことはないって、どういう意味？ わたしがだまっていると、お父さん

はちよつと遠くを見るような表情で言った。

「お父さんも、高校受験期にサッকারの練習を休まず、大切な試合に向けてせいっぱいがんばった。それが勉強の原動力にもなっていたんだ。」

うん……前にも聞いたことがある。だからこそお父さんはわたしのバレエも、ジュンのバレエとサッকারの二刀流も、理解して応援してくれてるんだよね。

「十代で大切なことが勉強だけじゃないってことも知っている。だから……お父さんは、めいを信じるよ。」

そしてお父さんは、千鶴先生の手紙をていねいにたたんで封筒にしまった。

「千鶴先生が、せっかくめいを主役を選んでくれたんだ。その期待にこたえられるようにがんばりなさい。」

「お父さん……ありがとう！ わたし、バレエも勉強もせいっぱいがんばります！」

ジュンが「やったー！」と声を上げて拍手をした。うれしい……お父さんが主役をやることを許してくれたのと同じくらい、わたしの気持ちをわかって信じてくれたことがうれしかった。



「めい、おめでとう！ 主役なんてすごいじゃないの！」

お母さんがキッチンから出てきて、ニコニコして言った。

「ありがとう、お母さん。家の手伝いだって、なるべくがんばるからね。」

お母さんはお父さんのほうをちらつと見てほえんだ。

「ふたりの話を聞いてて思ってたわ。めいのがんばりやは、お父さんの血を引いてるのね。」

そうか……今まであんまり思ってたことなかったけど、わたし、お父さんに似てるんだ

ね。照れ笑いするお父さんと目が合つて、わたしも笑った。

「めいちゃん、オデットがんばってね！ ジュン、すつごくうれしいっ！ 早くみんなに

自慢したい！」

「だめだめ、配役の発表があるまでは、誰にも言っちゃだめだからね。」

ジュンはえへへ、と笑ってからうなずいた。ああ、これで主役のオデットを踊れる。バ

レエも勉強も、どちらもわたしの大切なもの。中学校生活をしめくくる発表会と受験、悔

いのないように全力でがんばろう！



2 今年ことしは「白鳥はくちょうの湖みずうみ」第二幕だいいまく！

九月がつせいしよ最初のレッスンは終わおつたあと、千鶴先生ちづるせんせいは高等科こうとうかの生徒たちせいとを集めて言いつた。

「今年ことしの発表会はつひようかいの演目えんもくは……白鳥はくちょうの湖みずうみ、第二幕だいいまくに決きめました。」

生徒たちせいとから、わあっという声こえが上あがる。梨央りおが小きく、「え、二幕まく？」とつぶやくのが聞きこえた。

「今回こんかいはベビー科かと初等科しよとうかには別べつの演目えんもくを用意よういして、白鳥はくちょう二幕まくに出演しゅつえんするのは高等科こうとうか以上いじずの生徒せいとです。まだ配役表はいやくのようを書かいてないから、今いまここで発表はつひようするわね。」

うわー、今年ことしは配役表はいやくのようを貼はり出だす前に発表はつひようするんだ。わたしだけ、みんなとはちがう緊きん張ちやうの中で千鶴先生ちづるせんせいの次つぎの言葉ことばを待まつた。

「主役しゅやくのオデットは、めい。」

千鶴先生ちづるせんせいがさらりと口くちにすると、まっ先さきにジュンが拍手はくしゅをして、続つづいてパラパラと拍手はくしゅ



が起こった。もうつ、ジュンたらよけいなことしないでいいのに……気持ちはいれしい、でも恥ずかしいっ！

「めい、やつたね！」

となりになつた南がパツとこつちを向いて言つた。ありがとう、南……主役になれたこと、いちばん最初に報告したかつたのは南だつた。配役の発表まで誰にも言えないのがもどかしかつたんだ。

「はい、次ね。『二羽の白鳥』は、梨央、杏樹。」

おーつ、梨央と杏樹が二羽の白鳥！二羽の白鳥は「大きな白鳥の踊り」、通称ビッグ・スワンと言われている重要な役で、背の高いふたりにびつたり。杏樹はにつこりしてるけど、梨央はちよつと不満そう。わたしが主役なんて、梨央はぜつたい納得いつてないよね……。

「次は『四羽の白鳥』。南、ジュン……。」

えつ、ジュンが四羽!? またも大抜擢じゃない? 四羽の白鳥は「小さな白鳥の踊り」、四人で手を前で交差させて組んで踊るのが有名で、誰もが一度はやつてみたい踊

り。ジュンもびつくりした様子で、目をまんまるにしてかたまってる。

「うち、また四羽？ マジかー。」

南はちよつと苦笑いして言った。そうだ、南は二回めの四羽……もうすぐ六年生になる春休みに、わたしと南、梨央、杏樹で四羽の白鳥を踊ったんだよね。

「要はジュンたちの指導係かーい！」

南は、あいたた……という顔をして自分のおでこをパチンとたたいた。ジュンが呼ばれたのにびつくりしすぎて、あとのふたりを聞き逃しちゃったけど、この流れだと南がリーダーなのはまちがいないよね。そのあと千鶴先生はコール・ド・バレエ、群舞の配役を読

めいのバレエ教室③

バレエ団の最高位「プリンシパル」

プロのバレエダンサーは技量によって格付けされ、何を踊るかが決まっています。誰でも主役を踊れるわけではありません。「プリンシパル」はダンサーの最高の地位の名称ですが、バレエ団によって違いがあります。パリ・オペラ座バレエ団ではこれを「エトワール」といいます。はじめてプロになって入団すると、ふつうはコール・ド・バレエからスタートします。コリフェ、ソリストと階級が上がっていくとソロを踊れるようになり、とくにすぐれたダンサーがプリンシパルに任命されます。きびしい世界なんだ！（めい）



み上げてから言^いった。

「コール・ド・バレエは、梨^り央^おと杏^{あん}樹^{じゅ}と南^{みな}が経^{けい}験^{けん}者^{しや}だから、三人^{にん}が中心^{ちゆうしん}になつてみんなを引^ひつぱつていつてほしいわ。」

白^{はく}鳥^{ちよう}たちのコ^こール・ド・バ^バレエをわ^わたしたちが踊^{おど}つたのは中^{ちゆう}一の夏^{なつ}休^{やす}み、高^{こう}原^{げん}のバ^バレエフエス^{フエ}ティバ^バルだ^だつた。日^に本^{ほん}バ^バレエ協^{きよう}会^{かい}の泉^{いずみ}美^み智^ち子^こ先^{せん}生^{せい}のき^きびしい指^し導^{どう}を受^うけて、無^ぶ事^じに本^{ほん}番^{ばん}の舞^ぶ台^{たい}に立^たつこ^こがで^できたんだ。

二十四^{にじゅう}羽^わの白^{はく}鳥^{ちよう}たちのコ^こール・ドを必^{ひつ}死^しでつとめながら、セ^センタ^ンーに立^たつオデ^おッ^どットの美^{うつく}し^しと存^{そん}在^{ざい}感^{かん}に庄^{あつ}倒^{とう}さ^された。あ^あのオデ^おッ^どットを踊^{おど}るな^なんて……配^{はい}役^{やく}を発^{はつ}表^{びよう}さ^された今^{いま}も、や^やつぱりま^まだ実^{じつ}感^{かん}が^がない。

「めい、せ^せつか^かくだ^だから、ほ^ほら、み^みんなにひ^ひと^{こと}言^い、あ^あい^いさ^さつ^つした^たら？」

えー^えっ!? 千^ち鶴^{づる}先^{せん}生^{せい}、何^{なに}そ^その無^む茶^{ちゃ}ぶ^ぶり、そ^そんなの聞^きいて^いて^てな^ない^いよー! 去^き年^{ねん}の梨^り央^おだ^だつて、そ^その前^{まえ}のさ^さや^やか^かち^ちや^やんだ^だつて、主^{しゅ}役^{やく}のあ^あい^いさ^さつ^つな^なん^んて^てし^して^てな^なかつ^つた^たよ^よね? み^みん^んな^なの視^し線^{せん}が^がい^いつ^つせ^せい^いに^にわ^わた^たし^しに^に集^{しゅう}中^{ちゆう}す^する。あ^ああ、ど^どう^うし^しよ^う!

「あ……あ^あの……わ^わた^たし^しが^がオデ^おッ^どット^どな^なん^んて、ま^まだ^だ信^{しん}じ^じら^られ^れな^ない^い気^き持^もち^ちで^です。一^{いっ}生^{しょう}懸^{けん}命^{めい}が^がん

ばります！ よろしくお願いします！」

なんとかそれだけ言って。ぺこつと頭を下げると、今度はいつせいに拍手が起こった。顔を上げてみんなの笑顔を見たら、じわじわと胸にうれしさが広がった。

「めい、こちらこそよろしくね。」

千鶴先生は配役が書いてあったノートを閉じて言った。

「今回、さやかは大学の都合で出られないそうよ。」

え、そうなんだ、残念……。すると梨央が小さく「ああ、だからね……」と言ってちらつとこつちを見た。な、何、今の！ さやかちゃんが出るなら主役はさやかちゃんだけど、出ないからわたしになったって言いたいのか？ くーっ……ううん、何言われたって気にしない。だって千鶴先生は「今年の主役はめいしかないない」って、はつきり言ってくれたんだから。

「そうそう、あとユウヤも、今年はフィギュアスケートの合宿があつて無理なんですって。」

ロバーツ勇也くんはニューヨークで杏樹と同じ学校に通ってた頃からフィギュアスケー



トを本格的にやつていて、選手として大会に出たりしてる。表現力をつけるために始めたバレエ、最近「本業」が忙しいみたいでほとんどレッスンに来てない。ユウやくんのことが好きなジュンは、しょっちゅうメールのやりとりをしてるから、もう知ってたみたい。

「残念だけど、仕方ないわね。みんなで力を合わせて、最高の発表会にしましょう！」
千鶴先生が明るい笑顔で言うのと、ジュンが「ハイイ！」と手をあげて返事をした。それにつられてわたしたちも「はい！」と返事をした。

「おめでと、めい！ オデットがんばってー！」

更衣室に入るなり、南がぎゅつとハグして祝福してくれた。

「ありがとう！ 南も四羽のリーダー、がんばってね！」

南は唇を片方に寄せてひよつとこみたいなヘン顔をしてうなずいた。

「めい、Congrats! めいのオデット楽しみ！ ワタシもやりたかったからうらやましい！」

杏樹はこういうとき、素直に自分がやりたかったとか、うらやましいとか口にできるん

だよね……それもぜんぜんイヤミじゃなく。わたしは杏樹あんじゅのそういうところがうらやましい。

「杏樹あんじゅ、ありがとう！ わたしも杏樹あんじゅの二羽ふたはの白鳥はくちやう、楽しみ！」

杏樹あんじゅは完璧かんぺきなウインクでこたえた。か、かわいい……ティーン雑誌ざっしのモデルをやっている杏樹あんじゅは最近さいきんますますキレイになって、近くちかで見るとほんとに見とれちゃうぐらい。

「ジュン、配役発表はいやくはつぷようまで、誰だれにも言いわなかったよ、えらい？」

「えらいえらい。四羽よもその調子ちようしで頼たのむよー！」

得意気とくいげに言いったジュンに、わたしより先に南みなみが答こたえた。四羽よの白鳥はくちやう、ジュンにはハードル高たかいんじゃないかなって思おもうけど、南みなみがついていれば大丈夫だいじようぶだね。

「第三幕だいだつたら、ぜったいにオデイルはリオだったのにな。」

梨央りおがちよつと離はなれたロッカーのところでブツブツ言いうのが聞きこえて、南みなみがすかさずひじで突つついてきた。杏樹あんじゅとジュンも、こっそり顔かおを見合あわせてくすつと笑わらった。梨央りおは去年きよねん「くるみ割り人形にんぎよう」第二幕だい「お菓子かしの国くに」で、主役しゅやくの金平糖こんぺいとうの精せいを踊おどったんだからいいでしょ？



だつてわたしは、あのときのくやしきで「主役を踊れるくらいうまくなる」という今年の目標を立ててがんばってきたんだもの。実際に主役になれるとは思つてもみなかつたけど、その目標がかなつてうれしかった。

「ねー今日の配役発表、王子のこと完全スルーじゃなかった?」

南が梨央の発言をかき消すように言つた。そういえば千鶴先生、王子ジークフリート役を誰がやるのか何も言つてなかったよね。オデットになれたことが大事件すぎて、王子のことまで頭がまわつてなかった……。すると杏樹が目を輝かせて言つた。

「ワタシ、透くんがいい! 透くんのジークフリート、見たい!」

え!? わたしと南は同時に顔を見合わせた。そ、そんな夢みたいなこと、あるわけないよね……。もしあつたとしたら、幸せすぎて気絶しちやいそう!

「それはない。」

梨央がきつぱりと言つた。

「Why? どうしてそんなことがわかるの?」

杏樹が両手の手のひらを上に上げるジェスチャーで聞くと、梨央はどうでもよさそうな

口調で答えた。

「だって白鳥の湖の第二幕には、王子のヴァリエーションがないからさ。」

たしかに……！ 言われてみれば、二幕にはオデットのヴァリエーションはあるけど、王子のヴァリエーションはない。

「そんな見せ場が何もない役を千鶴先生がやらせるわけないし、透くんだって引き受けないでしょ。」

さすが梨央、理論的で正しいよね。別に期待してたわけじゃなくても、ここまではつきり「ない」って言われちゃうとね……はあ……。

「まあこれが、三幕もやるってことなら話は別だけどな。三幕には黒鳥のグラン・パ・ド・ドウで王子のヴァリエーションもコードもあって、ちゃんとジークフリートの見せ場があるからさ。」

もうっ、梨央が三幕でオディールやりたいのはわかったからー！

「オーケー、オーケー……透くんはスターだから忙しい、発表会には出られないかもね。」

杏樹が残念そうに肩をすくめた。そうだよ……南が、ちよつとなぐさめるようにわた



しの肩をぽんとたたいた。

「じゃあ、王子はわれらが遠山先生じゃない？」

遠山コウ先生は、中一のときの発表会で「眠れる森の美女」の「宝石のパ・ド・トロワ」を踊ったときに、わたしと南をサポートしてくれた先生。とっても信頼できる先生だし、安心感もあるし……うん、王子が遠山先生だったらいいな。

できたら透くんに会って、主役に決まったことを報告したいけど……今度会えるのはいつだろう？

《透くん、こんばんは。今年の発表会で、わたしは主役のオデットを踊ることになりました！うれしくて、まだ夢を見ているようです……自分には大役すぎることもわかってますが、せいっぱいががんばります！ めい》



「めい、おめでとー！ ついに主役、ゲット！」

昼休みの廊下で、カナこと伊藤佳菜子が両手で派手なガッツポーズをすると、歩いていった男子たちが振り返って二度見した。ふふふ、ちよつと恥ずかしいけど仕方ない……小学校のときからずっと親友のカナは、どこにいても注目されちゃう学校一のアイドルだからね。

「クララのときもあんなにうれしかったのに、今度は真正正銘、大人の主役だもんね。もう最高！」

五年生のときに、有村バレエスクールの記念公演「くるみ割り人形」全幕のオーディションで、子どもの主役・クララに決まったときも、カナは自分のことみたいに喜んでくれた。

カナは「いつメン」だったシオリンこと松本詩織と、ハルトこと加山陽翔といつしよに公演を観に来てくれたんだよね。シオリンは超難関私立中学、ハルトはサッカー部が強い中学に進んだからなかなか会えないけど、ずっとわたしの大切な友達。

「それも白鳥の湖って、うちが唯一、観られなかったフェスティバルのやつでしょ？」



カナはわたしのバレエの発表会はつぷようかいは皆勤賞かいきんしょうで、それ以外の舞台ぶたいもできるかぎり来てくれる。フェスティバルのときは、夏休みなつやすみの家族旅行かぞくりょこうちゆう中で、すぐく残念ざんねんがつてたんだ。

「あれを見逃みのがしたのは、めいがセンターの白鳥はくちようの湖みずうみを観みなさい、つてことだったのねー。超楽ちやうたのしみつ！」

わたしの「バレリーナになりたい」つていう夢ゆめを、ずっと応援おうえんしてくれてるカナが、そんなに楽たのしみにしてくれてうれしい！

「これで王子おうじが透とおくんなら申し分ぶんないのになあ。」

カナはくやしそうにバタバタ足あしを踏ふみならした。わたしは自分じぶんに言い聞きかせるように、首くびを横よこに振ふった。

「ううん、そこまで望のぞんだら高望たかのぞみだし。今はとにかく、オデットに集中しゅうちゆうする！」

「そうだね！ めい、えらい！」

すると後ろうしろから、パン、パン……とゆつくりした拍手はくしゅが聞こえた。ん……？ 振り向ふむくと、中学一年ちゅうがくねんからずっと同じクラスおなのガチのお嬢様じようさま、レイカこと水上麗華みなかみれいかがわたしに歩あゆみ寄よつて言いった。

「発表会の主役……それもオデットなんてすばらしいじゃないの、森原さん。」

「あ……ありがとう！ でもレイカバレエ学校みたいに名門じゃないから、発表会の主役、つていつてもたいしたことないから……。」

レイカは、うちのバレエスクールと同じ駅の反対側の、歴史ある立派なバレエ学校に通つてる。一度発表会を観に行ったら、立派なホールで、客席は上品そうなお客様でいっぱい……近くの公民館でやるうちの発表会とは大ちがいだったんだもん。

「そんなことない！ 名門だって、フツのそこだって、主役は主役よ。ね、レイカちゃんもそう思うでしょ？」

カナが怒ったように言うのと、レイカはさあ？ という感じで、ゆる巻き髪を指でさつと払った。

「でもね森原さん……オデットに集中しすぎて、受験勉強がおろそかになったら、行くところがなくなくなるんじゃないこと？」

ううつ、相変わらずレイカ、痛いところ突いてくるー！ まあ、レイカがただ祝福してくれるってわけではないよね……。



「うん、そうならないように勉強もがんばるつもりだから……。」

「そうそう！ 夏休みだって、めいはほかのバレエスクールのゲスト出演の練習しながら、学校の特別講座、コンプリートしたんだからー！」

カナがジマンするように言うのと、レイカの目が一瞬、するどくキラッと光った。

「そうよね、森原さんは夏休みの間じゅう、まじめに講座を受けていらしたわね……坂倉さんとごいつしよに。」

ギクッ！ もうっ、カナったら、余計なことをー！ レイカは野球部のエースピッチャー、坂倉大志くんのが気になるから、特別講座中もしょっちゅう豪華な差し入れを持ってきたり、いちいち嫉妬のまなざしを向けてきたり、大変だったんだから。

「ねえ、つねに学年トップのレイカちゃん第一志望の都立難関校も推薦で余裕でしょ？ だからお願い、めいに協力してあげて！ ついでにうちにも！」

カナはレイカの顔をのぞきこむように、両手を合わせてかわいくニコツとした。レイカはやれやれといった表情でため息をついた。

「そういうことなら仕方ないわね。三人まとめて面倒見てさしあげてよ。」

「やったー！ レイカちゃんがついてれば百人力！」

カナがまた、派手なガッツポーズをした。わたしももちろん自力でがんばるけど、レイカが協力してくれれば心強い。あれ……？ 今レイカ、「三人まとめて」って言わなかった？ ふたりじゃなくて？ あーっ、もしかして、三人めは……。

「よっ、バレリーナコンビ！」

坂倉くんが三年A組の教室から出てきて「よっ」と手をあげてみせた。レイカは唇の端をきゅつと上げて、美しいほほえみを作って言った。

「ごきげんよう、坂倉さん。夏休みじゅう苦労していた数学の復習は進んだかしら？」

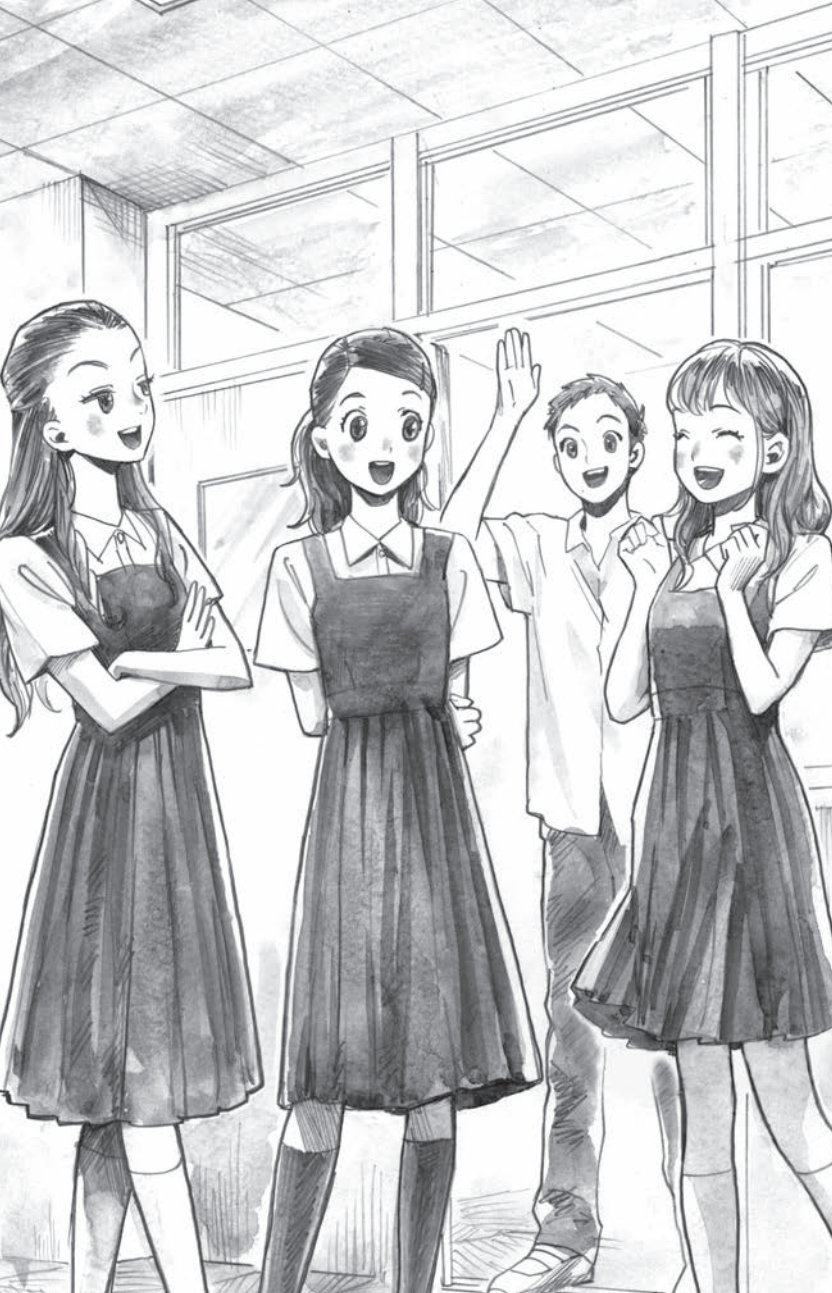
「それな！ まあまあ……いや、まだまだかなー。」

うん、まちがいない……レイカの「三人まとめて」には坂倉くんも入ってる！ っていうか、坂倉くんがメインでわたしたちがおまけ？

「今日はふたりして、レンの彼女と何やら密談かー？」

坂倉くんはカナが一年生の冬からつきあっているバスケット男子、レンレンこと島田蓮と友達だから、いつも「レンの彼女」って呼ぶんだよね。





「坂倉くん、その呼び方やめてよ。もう『レンの彼女』じゃないかもしれないでしょ？」
カナが口をとがらせて文句を言った。なにに、夏休みはレンレンと同じ塾の夏期講習
に通ってラブラブだったんじゃないの？

「やばっ、別れ話とか出てんの？ おれ、聞いてなくて。」

坂倉くんがあわてて申し訳なさそうに言う、カナはアイドルみたいにかわいくにつこ
りした。

「ゼーんぜん、出てないけどお、いつでもそういう可能性はあるっていう緊張感が大事な
の。」

なるほど、さすが恋愛マスターのカナ、深い！ カナは今、前から決めていたとおり
「都立に行つてチアやつて青春する！」のか、レンレンがスポーツ推薦でねらう同じ私立
高校に行つて「恋を中心に生きる！」のか、進路で迷つてるんだよね。それもあつてレン
レンとしよっちゆう言いあいしてるから、ありえない話じゃないし……。

「私もその呼び方には賛成できないわ。女性が男性の所有物かのような物言いは、かなり
時代遅れじゃないかしら。」



レイカがきりつとした表情で言う、坂倉くんはバツが悪そうに頭をかいだ。

「おけ！　じゃあさ、もうコンビに入れてやって、なんとかトリオ結成すれば？」

坂倉くんは早口でそれだけ言つて、ピューツと逃げるように行つてしまった。ちよつと、「コンビに入れてやつて」つて、坂倉くんが勝手にバレリーナ一号、二号つて呼んでただけでしょ？　そもそもわたしはレイカとコンビなんか組んだ覚えないんだから。

「トリオかー、いいね！　みんなで名前考えよ？」

えつ、カナ、意外と乗り気？

「そうねえ……伊藤さんがこれからバレエを始めるといふわけにもいかないし。」
レイカまで!?　まじめな顔して考えちやつて……。

「じゃあさ、うちは高校でチアやるし、めいのバレエの応援団だし……『バレリーナとチアトリオ』つてどお？」

「ええ、少し長い気もするけど、悪くないわ。」

「じゃあ決まり！　これからはトリオでよろしくー！」

あ……はは、ほんとカナとレイカつて、最初はバチバチしてたのに、実はけっこう気が

あ 合ってる。ふたりが友達になつてくれてわたしもううれしい！ よーし、トリオで力をあわせて高校受験こうこうじゅけんを乗りきろうー！

《めい、すげー！ やったじゃん！ アヒルのめいがついに白鳥オデットになるとは感慨かんがい深いよ。相変わらずオニの千鶴ちづるの攻めたキャスティング、期待きたいにこたえなきやな！

T o r u





何より大切な「登場のシーン」

「めいたちは白鳥のコール・ド・バレエをやったから、『白鳥の手』はわかつているわね。」

千鶴先生は正面の鏡越しにわたしたちのほうを見て言った。白鳥の手……！ 白鳥の役を踊るときの基本で、両腕を白鳥の羽のように動かすこと。

「両手を横に広げて手のひらは下。そこからひじからおろして、ひじから上げる。肩は上げない。」

千鶴先生は鏡に向かって白鳥の手をやってみせた。わあ、なつかしい！ わたしたちはこの白鳥の手を泉先生にたたきこまれたんだ。波を打つように、ひじ、手首、指先がおりると同時にひじから手首、指先の順で上がる。

「はい、白鳥の手の動きのまま、両手を頭の上まで上げて、下までおろして……これが

『白鳥の羽ばたき』。歩くときや走るときはつねに手は白鳥の羽ばたき、つて覚えておいてね。」

白鳥の羽ばたきは、基本的には手が上に行つたときは顔も上につけて、手が下に行つたときは顔も下につける。そうやるととたんに白鳥らしくなるから不思議！

「そう、鏡を見てよく練習してね。わからないときはお姉さんたちにお手本を見せてもらつて……はい、めい、代表して、白鳥の手をやつてみせて。」

千鶴先生がぱつとこつちを向いて言つた。おーつと、急に來たー！ わたしは少し前に出て、正面の鏡に向かつて横に手を広げて、白鳥の手をやつてみせる。ひじ、手首、指先の順で下へ……また、ひじ、手首、指先の順で上へ……。

「えつ、めつちやうまくない!？」

コール・ドの子のひとりが声を上げた。するとまわりの子たちも、うん、うん！ とうなずいて、「すごい」「きれい!」なんて口々にほめてくれた。わあ……そんなふうに言ってくれて、ちよつと気恥ずかしいけど、うれしい!

「ね、きれいでしよう。めいは泉先生にも、白鳥の手をほめられたのよね?」



そう、あのときも、今みたいに白鳥の手をみんなの前でやってみせたんだ。そのあと泉先生に「手はいちばんいい。脚はひどいけど」って言われてすっごく傷ついた……。でもそのときの経験が、今回のオデットに生きるんだって信じてる。

「めい、グッジョブ！ アームスの関節がな
いみたい！」

杏樹がきゅつと親指を立てて言った。

南はニンマリ笑って親指を立てて、ジュン
はニコニコ拍手してる。梨央は相変わらず
そっぽを向いてるけど……これで少しはみんなに、オデットを踊る資格があるって認めて
もらえたかな？

めいのバレエ教室①

そろえて踊る「コール・ド・バレエ」



大勢で踊る群舞のことをいいます。ソリストの後ろで踊ることもありますが、群舞だけの踊りもあり、全幕ものの作品には欠かせません。動きだすタイミングや、手や脚の角度などがきっちりそろっていることが美しく見えるポイント。わたしは「白鳥の湖」の踊りのほかには、「くるみ割り人形」の「花のワルツ」も大好き。プロのバレエ団では、どんな練習をしているのかな？（めい）



「白鳥の湖、第二幕、まずはオデットとジークフリート王子の出会いから始まります。」
千鶴先生が第二幕の音楽をかけながら言った。ターラターラターラターラターラ……白鳥の湖の有名なメロディで始まる湖のほとりの場面。

「みんなもう知っていると思うけど、いちおうおさらいしておくわね。第一幕はジークフリート王子の成人祝いの宴。そこで王子は、王妃から翌日の舞踏会で花嫁を選びなさい、と言われるの。」

そう、王子の友人たちが集まって楽しくやっていたところにお母さんが出てきてビシッと言われて、王子はまだ結婚なんてしたくないのに……って気が進まないんだよね。

「王子の友達が何人かで、気晴らしに狩りに出かけようと誘います。ほら、ここ、曲の雰囲気が変わったでしょう？ 王子の友達が舞台上に登場するところ。」

もの哀しいメロディから明るい曲調に変わって、王子の友人たちが弓矢を持って白鳥の群れを探して湖のほとりにやってくる。

続いて王子ジークフリートが舞台上に登場して「ひとりで狩りをしたいから」と友人たちに告げて、白鳥の群れに向かって弓矢をかまえる……そこで白鳥の王女、オデットと出会



うんだ。

「オデットの登場のシーンは、王子と組んで踊るところは少ないから、めいだけでも練習できるからね。」

千鶴先生は、上手奥にスタンバイしたわたしを見て言った。第二幕、オデットの出演は全部で五か所。まず「登場のシーン」、次はコール・ドのワルツの前にある「お願いのシーン」……王子に「白鳥たちを射たないで」とお願いする短い場面。

そのあと王子とふたりで組んで踊るゆったりした「アダージオ」。二羽の白鳥と四羽の白鳥をはさんで「オデットのヴァリエーション」。そして「コーダ」……コール・ドといっしょに、速いテンポの踊りがあつて、王子は最後に登場、そのままエンディングにつながる。

「アダージオはずっと王子と組んで踊るからあとでやるとして、まずは登場とヴァリエーションの練習をやっていきましよう。」

いよいよオデット、登場のシーンのレッスンが始まる！今朝、透くんがメールの返事をくれた。わたしが南たちと「四羽の白鳥」を練習していたとき、アヒルってあだ名をつ

けられて……白鳥たちのコール・ドをやったときも「アヒルだったおまえが、白鳥やるなんてなー」って言ってた。

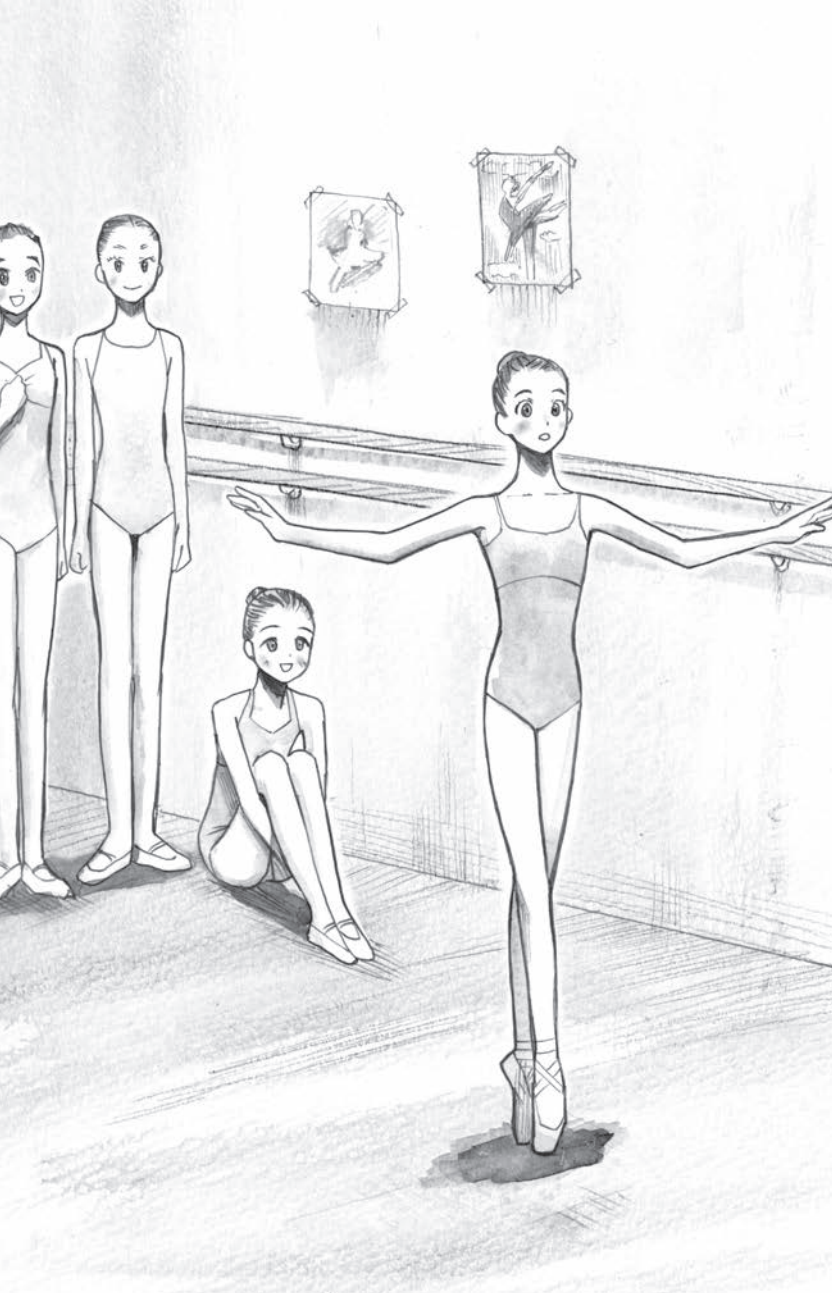
そのときの舞台のDVDをあれから何度も何度も見ていて、今回はオデットの部分を中心にまた何度も何度も見て……うちで音楽をかけて自主練習して、振り付けもしっかり覚えたと。よし、透くんが言ってくれたとおり、千鶴先生の期待にこたえなきゃ！



ターター……という音を合図に、わたしはコーナーから白鳥の手をしながら、右足前五番ポジションのポアント、つま先で立って小きざみに足踏みするパ・ド・ブルーでななめに進む。タンタンタンタン……グリッサード、グラン・パ・ド・シヤ！

「ジャンプはふわつと音をさせないでおりる……タン、タン！ 一度しつかり止まるー。」
前におろした左脚の膝をまげてプリエ、右脚後ろに伸ばして両手は前でクロスする……
白鳥が羽を閉じるように。





ターラターラ……右脚を前に出して、ポアント、つま先を床に刺すようにして立つピケのアラベスク……手は両手をななめ上に上げて手のひらを下に向けるアロンジェ。

「アラベスク、バランス……アロンジェ、胸の上からきれいにそつて……。」

アラベスクの脚をおろして前に出して、膝をまげるプリエ、アロンジェのまま上半身を後ろにそらせる。これも白鳥らしいポーズ！ タラララターラ……アロンジェから右手、左手の順で、前のクロスに戻して、顔を左肩のほうに向けて首を横に振るような動作をする。

「めい、子どもがいよいよ、するんじゃないの。白鳥がぬれた羽をふるわせて水を払い落とす身振りよ。もつと繊細に、優雅に！」

そう言つて千鶴先生は正面の鏡のところから下手のほうに歩いていった。あ……千鶴先生、王子のところをやつてくれるんだ！

水を払うしぐさまでをもう一度くり返したら、二歩歩いてピケ・アラベスク……そのとき下手前から王子が登場する……！ アラベスクの脚を、五番のポアントでつま先を重ねるようにして立つススにおろして、右手をさつと上に上げて手のひらを外側に、左手は体の前で手のひらを下にする。



「急に知らない人間が目の前にあらわれて、とつさに羽で身をかくすの。これが『警戒の手』だつてことがちやんとわかるように。」

警戒の手……羽で体をかくすようなイメージだ。王子から後ずさりするように、パ・ド・ブルーで少し下がりがりながら、センターまで走つて、パ・ド・ブルーで二回まわる。王子を意識しながら、上手前まで走つて、また警戒の手でポーズ。

「王子はセンターでマイム……『どうか、ここから飛んでいかないでください』。」

王子のマイム、オデットは直接見えないけど、お客様にはわかる。オデットは王子のいる右のほうを気にして、だんだんと頭を右に上げて様子をうかがっていると、左に気配を感じて顔を上げて、左側から来ていた王子に気づいて、左手を上げて身をかくす。

「はい、つかまえようとする王子からすり抜けるようにスートウニユ、すばやく！」

右脚を真横に出してから軸脚に引き寄せて一回転するスートウニユ・ターン、白鳥の羽ばたきを一度しながらパ・ド・ブルー……オデットが右に右に逃げていくのを王子が止めるように手を伸ばしてまわりこむ。

「ほらめい、ぜんぜん間に合つてない、それじゃ王子につかまっちゃうよ！」

わたしのストウニユの回転が遅くて、千鶴先生がまわりこむほうが早くなっちゃう！
四セット終わったらすくなめ後ろに走って、後ろに上げた脚の膝をまげるアティテュード……シャッセ、前の脚を後ろの脚で追いかけるように移動するパをはさんでまたアティテュード……王子から逃げるように、全部で七回。
一回一回、軸脚の右左もアームスもちがうし、全部ちがう場所で……ああ、途中でわけわかんなくなっちゃった！ 千鶴先生はCDプレイヤーのそばにいた梨央に合図して、一度音楽を止めてから言った。

「はい、王子とオデットでセンターシアとして、マイムのところ一度確認しましょう。」
センターをはさんで、客席に向かってハの字に開くように向きあう……千鶴先生が下手寄り、わたしが上手寄り。警戒の手でポーズして、そこからは身振りでお芝居をする。すごく楽しみにしてたところなのに、もう息が切れててマイムどころじゃないー！

「あなたは、どうしてここにいますのですか？」

千鶴先生が左手の手のひらを上にしてわたしのほうに差し出して「あなた」、左手を下げて甲で地面をさして「ここ」、両手を前から横に開いて「どうして？」とマイムしながら



ら言^いつた。その間^{あいだ}に警戒^{けいかい}の手^てをだんだん下^さげていつて、次^{つぎ}はわたしの番^{ばん}。

右手^{みぎて}で胸^{むね}の前^{まえ}をさして「私^{わたし}は」、頭^{あたま}の上^{うへ}に右手^{みぎて}を立てて左^{ひだり}、右^{みぎ}と動^{うご}かして王冠^{おうかん}を表^{あらわ}して
「王女^{おうじょ}」、王子^{おうじ}に背^せを向^むけるようにななめ前^{まえ}を向^むいて、白鳥^{はくちよう}の羽^はばたきをしてみせる。

「私^{わたし}は、白鳥^{はくちよう}の王女^{おうじょ}です。」

まわりで見^みているコール・ド・バレエの子^こたちにもわかりやすく、千鶴先生^{ちづるせんせい}がわたしの
マイムも言葉^{ことば}にする。

「おお、王女^{おうじょ}様^{さま}なのですね！」

千鶴先生^{ちづるせんせい}も王冠^{おうかん}のマイムをして、オデットに敬意^{けいい}を示^{しめ}して深々^{ふかふか}とおじぎをする。オデッ
トは「あなた」と王子^{おうじ}をさしてから、お客様^{きやくさま}のほうに顔^{かお}を向^むけて目^めを左^{ひだり}、右^{みぎ}、と指^{ゆび}さして
「見^みて」。右手^{みぎて}で王子^{おうじ}を導^{みちび}くように後ろ^{うし}に走^{はし}っていく。

「見^みてください……この湖^{みづうみ}は、私^{わたし}のお母^{かあ}さんの涙^{なみだ}でできました。」

両手^{りょうて}を波^{なみ}のように動^{うご}かしながら水面^{すいめん}を表^{あらわ}して「湖^{みづうみ}」、右手^{みぎて}で胸^{むね}の前^{まえ}をさして「私^{わたし}の」、
赤^{あか}ちゃんを抱^だくしぐさで「お母^{かあ}さん」。上手^{かみて}ななめ前^{まえ}向^むきの右足^{みぎあし}前五番^{まえばん}でパ・ド・ブー
レ、顔^{かお}をうなづくようにしながら両手^{りょうて}で目^めの下^{した}から、下^{した}に向^むかって指^{ゆび}を動^{うご}かして「泣^なく」。

「だから、白鳥の湖はくちようみづうみというタイトルの『湖』みづうみは、オデットのお母さんかあの涙なみだでできたものだったの。みんな知しってた？」

千鶴先生ちづるせんせいが聞きくと、首くびを横よこに振ふっている子こが多おほかった。そうだよね……わたしもこれを知しつたの、けっこう最近さいきんだった。白鳥はくちように変かえられてしまったことでお母さんかあを悲かなしませてる。オデットには、お母さんかあのためにも人間にんげんの姿すがたに戻もどりたい……という気持きもちちもあつたんだろうな。

「向むこうには、私わたしを白鳥の姿はくちように変かえた悪魔あくまがいます。」

そのあと、王子おうじのほうに向むきながら、左手ひだりての人差ひとさし指ゆびで上手前かみてまえをさしてから、にぎりこぶしを作つくった両手りょうてを、ひじをまげてグン、グン、と振ふり上あげて「悪魔あくま」、自分じぶんの胸むねをさして「私わたし」、上手前かみてまえのほうに向むきを変かえて羽はばたいて、「白鳥の姿はくちよう」。

「なんだって!？」

王子おうじがおどろいた表情ひようじようで「あなたは……」と左手ひだりてを出だすのを、オデットはさつと右手みぎてを立てて止とめる。

「待まってください。」



次にオデットは王子のほうに手の甲を向けて人差し指を立てて「ひとり」、心臓のところに両手を下からそえるようにして「愛する」、左手の薬指を右手の人差し指と中指の二本でさして「結婚」、正面に向かつて左脚前に踏みこみながらその右手の二本の指をななめ上に上げて「誓う」……。

「ひとりの、愛する男性が、真実の愛を、誓ってくれたら……。」
体の向きを変えて羽ばたいてから、王子のほうに向いて、首を横に振りながら、両手でちがう、という身振りをする。

「私は白鳥ではなくなります。」

それを聞いて王子は、「私」、「あなた」、「愛する」……。

「私は、あなたを、愛しています……はい、マイム最初から音かけて最後まで通すよ。」
千鶴先生の合図に、梨央が再生ボタンを押した。マイムも振付と同じでどの音がどのマイムをするかきっちり決まってから、合わせてやるとけっこう忙しい！

王子の「私はあなたを愛しています」のマイムをしたあと、千鶴先生はさつとわたしの肩を抱いて、下手前に向かつて歩き出す。二歩ゆっくり、四歩速く……あと二歩歩いたと

ところで、タタタタン！ という強い音……！

「はい、上手奥に悪魔ロットバルトがいるよ！」

そこからは激しい羽ばたきで動揺して逃げまどうオデット……ロットバルトに向かつて両手を重ねてお願いをする。

「どうか王子のことは助けてください……はい、その間に王子は弓矢を手にとってロットバルトをねらいます。」

千鶴先生は弓矢のかわりにスタジオにあったハンガーを持つて、かまえてる。わたしは左足前五番でパ・ド・ブルーレしながら羽ばたく……ロットバルトを守るように。千鶴先生が膝をついて、弓矢……じゃなくて、かわりのハンガーを持つてかまえるところに走っていく。ターン！ の音で、千鶴先生の左肩とハンガーを持つてアラベスク。

「悪魔を射たないで！」

アラベスクからおろした脚を前にして五番のパ・ド・ブルーレで、後ろに下がっていく。「手もおへそも王子のほうに向けたまま……離れがたいけど、悪魔の力に引っぱられていくように……。」



だんだんと両手を横に開いて、白鳥の手で上手奥、悪魔のいるほうに進む。センター過ぎたあたりでアラベスク、上手に走りこんでいく。王子の千鶴先生も、わたしのあとを追って走りこんでくる。

「はい、とりあえずお疲れさまー。」

千鶴先生はそう言っただけでわたしの肩をぽん！ とたたいた。はあ、はあ……それに答えることもできないくらい、息が切れて、脚ががくがくして。一度音楽を止めてマイムの確認したから、完全に通したわけでもないのに、なんで……？

「何ー、もうオデット全部踊り終えたつもりー？ まだ登場の場面だけなんですけど？」
両膝に手をつけて体をささえてるわたしの顔をのぞきこむようにして、千鶴先生が言った。あ……はは、わたしもこんなつもりじゃなかったんですけどー！ たしかに、このあとお願いのシーンとアダージオがあつて、ヴァリエーションがあつて、コーダであるのに……大丈夫か、わたし！？」

「オデットの登場のシーンは何より大切よ。ここでオデットの印象がすべて決まってしまうと言つてもいいくらい。」

わたしはまだ息が整えられないままうなずいた。

「とにかく、この場面ではお客様に物語を伝えないと。何やつてるかわかるようにはしないとねえ？」

「……今のじゃ、何やつてるかさっぱりわからないってこと？ でもそりやそうだよ……オデットだもの。主役だもの。最初からうまくできるわけなんてないんだから。」

「いい？ オデットの振り付けには全部、意味があるの。マイムのところだけじゃなくてね。」

千鶴先生は正面の鏡のほうに戻っていきな

めいのバレエ教室⑤

オデットの「グラン・パ・ド・シャ」



グラン・パ・ド・シャ！



第2幕でオデットが登場するときに印象的な「グラン・パ・ド・シャ」。ドゥミ・プリエの軸脚で、もう一方の脚は膝をまげた状態で前に出します。軸脚で踏み切ると同時に前の膝を伸ばしながら開脚して跳びます。白鳥がふわりと舞いおりて、観客の心を一瞬でつかんでしまう美しいジャンプ……うーん、むずかしいー！

(めい)

がら言つた。

「たとえば最初のグラン・パ・ド・シャは、水鳥が湖面にすーっとおりてくる様子。印象的な登場よ。」

そうだ……あの野外舞台の袖から、オデットの最初のジャンプを見たとき、まるで月明かりに照らされた湖のほとりに、一羽の白鳥がふわっと舞いおりたように見えて、本当にきれいだった。

「次のアラベスク、両手をアロンジェにするのは白鳥の羽を表しているから。」

オデットの踊りで両手を上げるときは、頭の上でだ円を作るアン・オーではなくアロンジェにするのがほとんどだもんね。白鳥の手をするときだけじゃなく、踊り全体のアームスを白鳥の羽だと思つて使う、つてことなんだ。

「王子と出会つてから、ずっと羽ばたいてるのは、早く飛び去つて逃げようとするオデットのあせりを表現してるの。」

わたしは千鶴先生のほうに行つて羽ばたきながら王子の手をすり抜けるスートウニユのところをもう一度やつてみる。そうか、だから王子はオデットが飛び立つのを止めようと

して、手を伸ばすんだ。

「最初はおびえて王子の顔も見られなかったオデットが、だんだんと心を開いて、悲しい身の上を話すまでになる……それが全部、振り付けになっているのよ。」

ほんとにそうだ……ただストーリー、お話の筋をわかってもらっただけじゃなく、オデットの心の動きをお客様に伝えるのも、主役の役目なんだ……責任重大！

「ロットバルトを弓矢でねらう王子を、オデットが止めるのはどうしてだと思おう？」

千鶴先生はくるつと振り向いてコール・ドの子たちに言った。

「だって、悪魔をやっつけてくれるなら止めなくてもいいんじゃない？」

それを聞いてみんなはうなずいたり、首をかしげたり、ううん、と首を横に振ったりしてる。

「はい、めい、みんなに教えてあげて。」

千鶴先生は急にこつちを向いて、いたずらっぽく笑った。ええー、またわたしに振るー？ ううつ、合ってますように……！

「ええと……愛を誓ってもらう前に悪魔が射たれてしまうと、オデットは白鳥の姿から人



間に戻れなくなるから……。」

「そう、正解！」

ほーっ！　ここでまちがえたら、オデットの面目まるつぶれになるとこだった！　でもわたしも前に、オデットはなんで王子を止めるのかな？　って思ったことあったんだよね……気づいててよかった！

「じゃあ、悪魔を射とうとする王子を止めるとき、オデットはどうしてパ・ド・ブルーを細かくいつぱい踏むのか？　なぜ大きく激しく羽ばたくのか？　オデットが悪魔に願うするのはどういう気持ちなのか？　そういうことを全部、自分で考えて踊りなさい。」

千鶴先生は、ピシヤリとしめくくるように言った。振り付けには全部意味がある……もちろん前から習っていたことだし、クラシック・バレエはすべてそうなんだけど、オデットの振り付けはとくにその意味が重要なんだ。

「はい次はコール・ド……めいは休憩、じゃなくて自習よ！　今日はアン・ドウオールも甲伸びてないのも全部、目つぶってあげてるんだからね！」

「はいっ！」

最後の最後にオニの千鶴のカミナリ、落ちたー！ パツと目が合った南が、引きつり笑い
みたいなへん顔をしたから、思わず吹きだしそうになった。千鶴先生が見逃してくれて
る間にちゃんと練習しなきゃね。

みんながいつせいに上手奥のコーナーにスタンバイするのと入れ替わりに、わたしは
じゃまにならないように下手のコーナーに引き上げた。

登場のシーンだけでも、こんなにしつかり踊るところと、マイムや振り付けで役柄を演
じるところがある。ものすごく大変だけど、ものすごくやりがいがある。ワクワクする
……すつごく楽しいつ！ やっぱり主役つて、最高！

